

視点

世界のどこでもやっていける 気力と能力をつけてほしい

●インタビュー
田中優子 法政大学総長

たなかゆうこ ● 1952年生まれ。法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学。法政大学第一教養部教授、法政大学社会学部教授、法政大学社会学部長を経て、2014年4月1日より法政大学総長。主な著書に『江戸の想像力』『グローバリゼーションの中の江戸』など。



この4月から、法政大学総長に田中優子氏が就いた。東京六大学初の女性総長として注目が集まる。法政大学文学部出身で、主に「江戸学」の研究にあたってきた田中総長。母校のトップに立った今、どのような課題に取り組みもうとしているのか。お話をうかがった。

自由と進歩の 雰囲気は今も続く

——田中総長が考える法政大学とは、どのような大学でしょうか？

田中 今の言葉でいうと「市民のための大学」になるでしょうか。法政大学は開学以来、「自由と進歩」という言葉で語ってきて、その思想はずっと継続してきていると思います。

私が1970年に入学したときは、まさに「自由と進歩」の校風でした。大学が秩序を押しつけるというのではなく、教員は率先して社会のことを考えているし、学生が社会と対峙したり真剣に考えたりすることを批判しました。むしろ歓迎する傾向がありました。

もう一つは、学問という意味でも自由なところで、当時は圧倒的に東大出身の先生が多く、ともすると学会の中心的な学説を押し付けられるということがあるなか、決してそうではなく、学問という意味でも非常に新しい考え方を持った先生が多くおられました。

そういう雰囲気でしたので、私は水を得た魚のように泳いでいたという気がするんです。日本文学科に在籍していましたが、他の学部の先生方とも交流をして、本当に自由で活気のある大学だと思いました。

その後、日本の大学全体がだんだんと落ち着いてきて、なんとなくこの大学も同質化してくるのですが、そのようななかでも法政大学の校風は残っている気がします。それは、非常に多様な人たちが大学にアクセスしてきて、自分の頭脳で考えることができる自律的な学生が多いということなんです。教員もただ教えるのではなく、彼らの力を引き出しながら、率直に意見を闘わせるということがよく行わ

れます。

ですから、「自由と進歩」を大前提にして、「市民のための大学」という方向をさらに推し進めていきたいと思っています。

——課題があるところを、どのようなことでしょうか？

田中 大学全体が落ち着いてきて、「グローバル化」が言われるようになってくると、どの大学も同じことをやりはじめます。法政大学もどうしてもその方向にいかなければならぬので、特徴がなくなる恐れがあります。

法政大学には、スポーツ健康学部や現代福祉学部、キャリアデザイン学部、グローバル教養学部などユニークな学部ができましたから、大学の中にいるとその特徴が見えます。しかし、外から見るとあまり見えません。よくわからないと言われます。新しい学部が多くなればなるほど、違いがわからなくなる、ということがあるのだと思います。ですから課題としては、メッセージの弱さを認識して、外に向かって、学部の特徴や学科の特徴をきちんと出すということ

ですね。

私が総長選挙のときに掲げたのは、法政大学の広報を強化することでした。パッケージを派手にするというのではなく、元々持っているものをきちんと外に出しましょう、ということなんです。これは単に受験生を増やすという効果のみを言っているのではなく、学生の勉強のしやすさにつながるからです。入学してきた学生が、ここで何を獲得できるのかが鮮明になるといいことです。

——学生へのサポートも大事になってきますでしょうか？

田中 学部が増えると科目が増えますので、入学したばかりの学生は、どれをどうやって組み合わせていいのかわからなくなりません。しかも、他学部・他学科の科目を選択できる仕組みもありますから、なおさらわからなくなるんですね。学生が目指す方向に行くにはどのような科目の組み合わせがあるのか、どのような4年間を過ごしたらいいのか、キャリアについても考えながら、丁寧な履修指導を

していく態勢がぜひとも必要だと思っています。

グローバル化は 大学の特長を作るチャンス

——日本の大学の今の課題は何だとお考えでしょうか？

田中 やはり、一方方向に行ってしまうというところでしょか。大学はそれぞれ特色があつて、多様性があつたはずなんです。グローバル化によって、どこも同じことをしなければならぬということになり、特色を失いかけています。文部科学省のグローバル化の基準を誤解したまま走っていき、結果的に基準をクリアしたか、しなかったかで序列がつかってしまうことは、おかしなことですね。

ですから、グローバル化のシヨンをどう捉えるか、中身の問題に入っていくかなければいけないと思います。ただ英語ができるようになるというだけの話ではなくて、議論ができるか、情報リテラシーがあるか、自分の言葉で話せるか、日本の文化

を知っているか、そういったことと総体だと思えます。それぞれの大学は、その総体をどのような組み合わせにして、学生の力としていくのかを考えるべきで、これは大学の特長を作るチャンスだと思います。

例えば、留学生と日本の学生がいつしよに英語で議論する場を作れば、日本の学生にとってもすごくいい経験になります。このように、グローバル化のシヨンもいろいろと生かしていく道がありますので、一律に考えないで、各大学が工夫を積み

重ね、独自の形を作っていくことが課題になると思います。

——大学が一方方向に行っているというのは、社会的な雰囲気も影響しているのでしょうか？

田中 安定した将来を望む傾向が強くなっているというのはあると思います。高度経済成長のときは確かに安定していましたが、あるときから、大企業の倒産や合併がはじまって、いい企業に入ったとしても安定しているとは限らないということがだんだんとわかってきました。そうすると、不安だから公務員の



ほうがいいと考えはじめるわけです。このように社会の動きに左右されて安定志向になるという傾向は、どの大学でも一律に起こっていると思います。

しかし私は、これは逆行だと思っただけです。というのは、本当は世界にはさまざまな企業があつて、しかも新しい仕事が続々と生まれているんです。新しい企業が立ち上がったのは潰れてを繰り返してはいますが、そのなかで充実して仕事をしている人たちはいるわけです。世の中には、会社が潰れても自力で生き残る人たちがいるのです。

世界はそのような方向に向いていると思います。ですから、大企業に入つて、年功序列のシステムのなかで安定することを考えるよりも、むしろ、世界のどこに行つてもやっていける気力と能力をつけることを目指したほうが絶対にいいだろうと思います。そうでないと生き残れない。安定志向はわかりませんが、むしろ、それだけを考えるのは危険だということです。

——そのときに大学の役割は重要

になりますね。

田中 保護者の方や高校の先生方で、世界情勢に精通し、世界にどれほど多様なタイプの生き方があるのかを知っている方というのはそれほど多くないと思います。ご自分の仕事で知る範囲の中で子供のことを考えますので、安定志向になる傾向があるかもしれません。

ところが、大学にはいろいろな専門の先生がいて、世界情勢をよくわかっています。ですから、世界の仕事場は今こうなっている、こんな仕事がある、こんな企業がある、ということを知らせてあげるのが大学の役割になると思います。

そう考えると、キャリアセンタ―はさらに知的な場になつていくでしょう。学問としてではなく、現実問題として世界経済を把握している唯一の場所となり、情報発信の基地になるべきだと思います。

——就職活動が大学に与える影響をどうお考えでしょうか。

田中 4年生のゼミがほぼ成り立たない、授業にも出席しない

はこれを歓迎することにしていくんです。

彼らは就職活動には真剣に取り組んで、モチベーションが高く、頭が活発に活動していますので、知性向上のチャンスなんです。私は、このような捉え方がさまざまな工夫をしていくのがいいと思います。

生涯勉強をするための能力をつけてほしい

——日本は女性の社会進出が遅れていると言われていますが、この問題をどのように見えていますか。

田中 女性はかなり現実的にものを考えます。例えば、役員になることは、残業手当が出なくなるし、労働時間が長くなるので、あえてならうとは思わないという傾向があるかもしれません。女性は、出世や地位よりも、実利を優先しようと思つて。でも、あまりにも現実的に考えるために、責任を取るとはどういうことか、そのような地位に就いたときに世界はどう見えるのか、という体験をする機会を逃していると思います。ですから

私は、女性の地位が上がれば良いとか、男性と競争して勝とうとかではなく、自分が成長する機会を逃しているという側面にもう少し目を向けてほしいと思います。それから、女性が持っているさまざまな能力を引き出し、活発化させ、一つの成果に結びつけるには、ある条件が必要だと思つています。それは自由であることです。この側面は男性よりも強いのではないかと思つています。私の経験や他の女性たちの経験をみても、権威的な圧力を与えられる、強い口調で命令される、一方的に決められる、理不尽な規則で縛られる、という環境では、女性は才能を発揮できません。出世や地位への野心がなく、むしろ自分の中にある能力をどうやって引き出すのかを考えるのが女性ですから、自由な環境を作つてあげることが大切になると思います。女性の才能を伸ばして行くことは社会にとって重要なことです。女性の役員が多いところは、成果が高いというデータがすぐ



など、たくさんの方が以前から起こっています。では、それが全て悪いということにしてしまつと、大学も企業も行き詰まってしまうんです。ですから、大学が考えていることは、これをキャリア教育の一貫として捉えよう、ということなんです。

例えば、4年生になるとゼミに來ないという問題については、それを一旦受け入れ、教員が相談相手になるところが重要です。必ずしも企業を紹介してあげるとかではなく、どのように生きて

いくのか、何を決断したらいいのか、決断とは何なのか、自分がやりたいことを親に説得するにはどうしたらいいのか、そのようなことをゼミの中で互いに話し合います。

もう一つ起こっていることは、わりと早く内定が得られた学生は、卒業論文を就職先に関するテーマにして研究する、ということなんです。例えば、東京都庁への就職が決まった学生は、卒論のテーマを東京都の観光政策に関するものに変えて、基礎的な知識を得ることにしました。私

に出てきています。女性の社会進出によってどのような影響が出るのか未知数だけれども、かなり希望がもてるものがあるのではないかと思つています。

——女子学生はコツコツ勉強するので優秀だという話をよく聞きます。

田中 私の実感では、ゼミのなかで活発に議論するのが女性なんです。つまり、コツコツタイプではない女性が出てきているんです。意見を言ったり、質問をしたり、女性のほうが積極的です。それだけ頭が回転しているということなんです。そのような意味でも、大学としては女子学生にもっと来てほしいなと思つています。

——学生に大学4年間で身につけてもらいたいことは何でしょうか？

田中 学生には自分の勉強の仕方を獲得してもらいたいですね。なぜかという、勉強は大学4年間で終わりでないからです。社会はどんどん変化していくし、本人も世界のどこで働くかわからない。卒業してからもいろいろ

ろなところで勉強していかなければならぬわけです。会社の中で勉強したり、それでも足りなければ、どこかの学校で、また自分で勉強する必要性が迫られます。

そのときに、どうやって勉強すればいいのかわかっているば大丈夫なんです。今は大規模公開オンライン講座の「MOOC」などもありますから、英語の聞き取り能力があれば、世界の一流の先生の講義だつて受けられる時代になりました。

そういう意味でも、知識の量ではなく、むしろ、生涯勉強するための能力をつけておいてほしいと思つています。日本語と英語での読み書き能力とコミュニケーション能力、論理的にものを考える能力、考えていることをきちんと本で調べたり、データで裏付けて説明する能力。このようなことを大学で経験して体に入れたらいいです。そうすれば、世界のどこでも生きて行かれます。

(構成/沢辺有司)